

| | | | |
|-----------------|--|----------------------|--------|
| 授業科目名 (英文表記) | 世界農業遺産 (Globally Important Agricultural Heritage Systems) | | |
| 単位数 | 2 (学部生のみ) | 授業形態 | 講義・演習 |
| 担当教員 | 原 祐二、養父 志乃夫、此松 昌彦、ゲスト講師 | | |
| 開講 | 南紀熊野サテライト、みなべ町うめ振興館 他 | 区分 | 学部開放科目 |
| 実施日・時間 | ①12月4日(土) 13:00~17:00 | ③1月29日(土) 9:00~17:00 | |
| | ②12月11日(土) 9:00~17:00 | ④2月5日(土) 9:00~16:00 | |

【授業のねらい・概要】

みなべ・田辺の梅システムが世界農業遺産に認定されたこともふまえ、世界農業遺産とは何か、当地の農業遺産のシステムと生態系の価値ついて、一般的な生態学の知見も交えながら、座学と現地生態系演習により習得する。地元「世界農業遺産協議会」の全面的な支援のもと、農業遺産のシステムを説明・活用できる人材を育成する。

本講義は「みなべ・田辺地域世界農業遺産推進協議会」による寄附講座である。

【授業計画】 ※記載の内容は変更することもあります。

第1回(会場:ビッグ・ユー)

1. 世界農業遺産と日本(ゲスト講師 IGES理事長 武内和彦氏)
2. 紀伊半島の地質と梅システム(此松昌彦)
3. みなべ田辺の梅システム(養父志乃夫)

第2回(会場・演習先:みなべ町うめ振興館、紀州石神梅林他)

4. 石神梅林現地踏査(梅林と薪炭林)(ゲスト講師 石神忠夫氏)
5. 梅システムによって生産される梅料理の評価(ゲスト講師 みなべ町梅料理研究会)
6. 梅システムとニホンミツバチ(ゲスト講師 京都産業大学 高橋純一氏)
7. 梅システムの歴史(ゲスト講師 梅システムマイスター 上野章氏)

第3回(会場・演習先:うめ研究所、紀州備長炭振興館、みなべ町清川地区他)

8. 梅の植物生理と育苗(ゲスト講師 県立果樹試験場うめ研究所)
9. 薪炭林持続性調査(ゲスト講師 松本貢氏)
10. 梅システムの申請プロセスとアクションプラン(ゲスト講師 県・市町行政担当者)
11. 備長炭生産調査(ゲスト講師 原正昭氏)

第4回(会場・演習先:南部梅林、みなべ町うめ振興館)

12. 観梅状況・ランドスケープ調査(ゲスト講師 梅システムマイスター 糸川昭三氏)
13. グループワークによるプレゼンテーションスライド作成(ファシリテーター 原祐二・古久保綾子)
14. プレゼンテーションと学習成果の共有
15. 梅システムの今後の展望と総括(原祐二)

【到達目標】

世界農業遺産の概念と梅システムの特徴について、社会生態学的観点から理解を深め、他者に対し現地で科学的・論理的に説明できるようになること。

【教科書】

特に定めません。必要に応じて資料を配布します。

【参考書】

【梅システム申請書】など、以下よりダウンロード可能。必ず事前に確認・予習しておくこと。

<https://www.giahs-minabetanabe.jp/>

【関連報文】 <https://doi.org/10.2750/arp.35.379>

【履修上の注意・メッセージ】

多くの現場の方々を支えられたカリキュラムであり、受講者は極力全日程参加すること。

【履修する上で必要な事項】

受身にならず、積極的に議論に参加し、自己成長を希求すること。

みなべ田辺地域に関心を持ち、かつ客観的に梅システムを世界・日本の農業システムの中に位置づける熱意を有すること。

【受講を推奨する関連科目】

南紀熊野サテライトにおける紀伊半島・地域再生関連科目 ランドスケープ・エコロジー、緑地環境学など

【授業時間外学修についての指示】

本授業の授業計画に沿って、準備学習と復習を行ってください。さらに、授業内容に関連する課題に関する調査・考察を含めて、毎回の授業ごとに自主的学習を求めます。授業時間の約2倍の授業時間外学修が必要です。

【その他連絡事項】

PCやタブレットがあれば各自持参すること(必須ではない)

和歌山市内発着のマイクロバスを運用予定です。地元参加の方は現地集合となりますが、事情により一部区間マイクロバス同乗が可能です。全行程を通じ、学生一名当たりの自己負担は、食品雑費など数千円程度を見込んでいます。

※行程の詳細については、都度ご連絡いたします。

※現地講義という性質上、極力対面形式にて行う予定ですが、実施時期に新型コロナウイルス緊急事態宣言が発令中の場合は、受講者の安全確保の観点から、オンラインによる遠隔授業にて行う場合があります。その場合でも現場の臨場感を重視した内容にて運用する予定です。なお、オンラインによる授業を行う場合に必要パソコン、ネット環境は、各自で準備して下さい。